2021年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2022/9/29

団体名	NPO法人　和太鼓教育研究所	活動タイトル	障がいを持つ児童への和太鼓・打楽器を積極的に用いた発達支援・療育プログラムの実践

望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）

●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	私たち団体の実現したいビジョンは、障がいの有無に関係なく、互いの違いを認め合いながら、共に助け合い、学び合い、個々の特性を活かして誰もが自分の力を存分に発揮できる社会になっていくことです。 障がいを持つ子どもたちも、障がいを一つの個性として、生き生きと自分の能力を十二分に高めていくこと、そして社会の中でかけがえのない大切な存在となっていくこと。そのために、まずは児童の段階での個性に適した、専門性のある発達支援サービスを身近に受けられる状況を様々な立場からつくっていくことが望まれていると考えております。
●団体の社会的役割（ミッション）	当団体は和太鼓という原始的な奥深い楽器を、子ども達の教育・保育目的に、全ての人々の健康で心豊かな生活づくりのために、活用するための研究・実践機関として、日々活動を行っております。 私どものこの度のミッションは、活動の中で蓄積してきた和太鼓を使った専門性のある実践ノウハウを、障がいのある子どもたち向けに特化させた形で「発達支援・療育プログラム」をつくり、実践していくことです。和太鼓・打楽器音楽を使った専門的な取り組み行うことにより、対象となる子たちが、障がいを一つの個性としてのびやかに育っていくこと、自分の能力を十二分に高め、社会の中でかけがえのない存在となっていくようにしていくことです。
●団体の活動基盤	●人材育成：利用者の目的・ニーズに合わせた和太鼓指導ができる専門性を持つ人材を育成する。また、事業を企画立案し運営できる中核を担う人材も育成する。 ●物的資源：事業で使いたいときに使うことができる拠点防音会場を、まずは関西圏で１会場つくる。また事業で使用する楽器を必要量確保する。 ●活動資金：常勤スタッフの生活ができるための資金、会場費、広告宣伝費等の費用を確保し続けるため、自主事業でこれまで以上に収益を高めていく。 ●ナレッジ：音楽療育、和太鼓のプログラム等々、最新の研究、知見を日々得ていく。私たちのような事業を行うＮＰＯ法人運営に関わる、各種情報を常時得るようにしていく。

■活動風景

活動風景①

指導者の音と掛け声にを聴きながら自分のタイミングではあるがからだを弾ませて太鼓を叩いている。ばちをしっかり持って両手で打つことの連続は最もシンプルな形だが、次第に高揚してくる気持ちと一緒に和太鼓の音と「共振」できる大切なプログラムである

活動風景②

たくさん太鼓に向かった後は「もっともっと打ちたい」気持ちが高まり体が動き出す。思わず太鼓の周りを叩きながら回ったり一緒に動いてくれる大人の笑顔にも共感しながらどんどん楽しくなって動きが大きくなっている様がみられるシーン。腕が上がり胸が広がっていることに心が解放されている様子が見て取れる。

■活動報告

★障がいを持つ児童の親子のための和太鼓・打楽器体験会

2021年９月～2022年３月末までの期間に行った。度重なるコロナ感染拡大の影響が大きく、また「障がい」の文字があることで通常借りることのできる教育施設の許可が下りなかったこと等、様々な逆風で、最初は体験者を集めることができなかった。都市部ではなく、できるだけ利用者の暮らす「地域」に近い場所で、和太鼓の鳴らせる、利用料の高すぎない場所で土日に行うということで会場条件を選定し直し、HP・SNSや地道な広報で体験参加者を募り、少しずつ人数が増え、実施できるようになっていった。

★日本文化を知る鑑賞会と参加できるワークショップ

当初「単発体験会」から「定期的プログラム」につなぐものとして本企画を行う予定だったが、様々な計画変更から、夏休み期間中に兵庫県と大阪市で合計２回のイベント「第一回どんど鼓フェスタ」を成果発表の機会も含めて行った。プログラムでやっていることを実際に披露してもらい、子どもたちの成長ぶりを見ることが出来、保護者からはプログラムに通うまでと現在の子どもの変化を語っていただける機会もあり、まだまだ試行錯誤ではあるが、大きく方向性が間違っていることはないと確信することができた。

★和太鼓・打楽器を使った定期的な療育プログラム

2022年４～５月から、兵庫県明石市・大阪府四條畷市・柏原市・京都市右京区の４会場で開校することができた。また堺市では同プログラムに発展させるべく「子育て支援ルーム」の形で不定期に行った。会場の確保・実技時間の設定・参加費・必要な用品・和太鼓の調達・指導者の確保・入会ルールの設定等々、試行錯誤しながら実際面を構築していくことができた。実技面で保護者の支援も必要とする参加者には、親子で一緒に参加を促し、結果的に親子のふれあいの時間・子育て支援の場となった。

★（活動基盤強化）スタッフの研修・研究会の実施

実施プログラムはこれまでのノウハウを基に、障がいのある子どもに合わせた内容に構築した上で、指導者同士が価値観や指導方法の共有をしながら進めていった。また月１回・約３時間、「療育的なプログラムを使った和太鼓指導」に対する指導者養成講座も実施。障がいや運動発達の理解・和太鼓を使っての指導法等々を、時には現場の動画を見ながら座学を、指導当日には実際の子ども達と同じ時間を過ごすことで障がいの理解を深めてもらった。障がいの重い子どもも参加しているため、各種資格をもつ専門家に助言を受ける場も持った。今後も知見を頂きながら、定期的に指導者への研修を行っていく。

■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)

★障がいを持つ児童の親子のための和太鼓・打楽器体験会

障がいをもつ児童に向けての和太鼓を使った体験会を兵庫（明石）会場で５回・大阪天満橋会場で１回の開催

参加者数：のべ２６名　体験後のアンケートで５０パーセント以上が２段階アップしたと回答。体験後定期的に通いたいという動機につながった。

★日本文化を知る鑑賞会と参加できるワークショップ

鑑賞することで、体に直接伝わってくる和太鼓の振動や響きを通じて、日本文化の良さを感じ取ることができた。

鑑賞後見た演目を今度やってみたいという子どもの声があった。また指導者の演奏のようすを食い入るように集中する子どもの様子が見られた。保護者からは日常では見られない子どもの様子（集中する力・人前での振る舞い）について、成果を感じる発言があった。参加者の５０パーセント以上が３段階アップしたといえる。

★和太鼓・打楽器を使った定期的な療育プログラム

・兵庫（明石）会場は定期を５回開催。体験参加（重複含む）のべ２６名から、８名が定期参加となった。

・大阪（四條畷）会場は、定期を３回開催。体験参加２名のうち２名が定期参加。

・京都（右京）は、定期を３回開催。体験者３名のうち２名が定期参加となっている。

・全体で今年度の定期参加者は１２名となった（８月末時点）。

★（活動基盤強化）スタッフの研修・研究会の実施

・指導スタッフ同士は、ラインやメールを活用し、実施後に振り返りをしながら成果や困難な状況克服の共有など行ってきた。想定したとおりに運ばないことが多く、内容面で知恵や工夫が求められたが対応力や気づきの姿勢が回を経るごとに上がっていった。資質の向上につながっている。

・「指導者養成講座」という研修の場を用意し、３名が常時熱心に参加した。年度後半では、学んだことを実践の中で活かしたいことや理想と現実の差を実感するため、積極的に現場研修に参加となった。このこともスタッフの資質向上につながったといえる。

■事業を通じて得られたノウハウ

得られたノウハウとしては以下を挙げる。

①参加者には、予想よりも重度に障がいのある子どもの参加が多かったことが以外だったが、このような活動を保護者からも大きく求められていることを知った。

②障がいの種類も度合いも様々な子どもが一緒に活動できるためには、和太鼓を使ったプログラムをどのように具体的に組んだら良いかが模索点であったが、集団で行うことの問題点もはっきりしてきたことで改善する方向性が見えてきた。

③障がい児の教育現場での有識者から具体的なアドバイスを受けることで、プログラムの構築について具体的なイメージがもてた。

④WEB・SNSを使った広報や、チラシなどの文章の作り方を、よりわかりやすい、伝えやすい文言の選ぶことが必要と感じた。他の団体とも連携をしていく上でも、わかりやすいアウトプットを心がけて行く必要があることを、直面するテーマとして得られたと感じている。

■望ましい社会状況を達成するための課題

私たち団体の実現したいビジョンは、障がいの有無に関係なく、互いの違いを認め合いながら、共に助け合い、学び合い、個々の特性を活かして誰もが自分の力を存分に発揮できる社会になっていくことです。

このようなインクルーシブな関係性をもった生活を続けるためには、障がいのある子どもの場合、例えば得意なこと、苦手なことと誰でもがもつ「個性」を理解しながら毎日を送ることだと考える。和太鼓を使ったプログラムも障がいのある子どもだけのプログラムではなく、将来的には一般の子どもも障がいのある子どもと同じ部屋で同じ時を過ごし、それぞれの成果成長をみんなで讃えあうようなスクールとなることを、理想像として思い描いている。そのために、どんど鼓学舎の事業を進めて、広げていくこと、実践を社会に知らせてアピールしていくことが今後の課題である。

この実践を大きく広げていくための具体的な課題の一つとして、他の団体と連携していくことが挙げられます。次年度では、自分たち団体の活動だけでは得られない、多方面での広がりや深まりが得られるような、他の団体との連携に積極的にチャレンジをして参りたいと考えております。

■活動成果のアピールポイント（自由記入）

この一年間の活動を通じて	障がいを持つ児童への和太鼓・打楽器を積極的に用いた発達支援・療育プログラムの実践『どんど鼓学舎』事業の礎となる指導内容及びノウハウ、担い手育成	を達成しました。

■受益者の具体的な変化（自由記入）

通ってくる子どもの中に「ずっと通いたい」と積極的な発言をしてくれる子が出てくるようになった。また、和太鼓プログラムに関わる前と比べて明らかに子どもの方からの意思表示がみられるようになったという話を聞いたり、和太鼓の日を楽しみにしているという発言を保護者から聞くことが増えた。子どもからの言葉の発語も増えてきた感もある。